
地味に地道にやっぺいこう。

七畳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

地味に地道にやっていこう。

【Nコード】

N0594Q

【作者名】

七畳

【あらすじ】

不幸続きの尾張謳來君。

そんな彼の不幸にはとある原因があった。

そのせいで世界から追放されてしまった彼は異世界でがんばっていかうと決意を新たにするが？

もらった微妙な能力と共に彼は異世界に行く。

そう、幸せな人生を手に入れるために。

光柱（前書き）

さあ、受験勉強も追い込みに入る今日この頃。
そんな時期に小説を書き始めた自分。

「だが後悔はしない、絶対にだ！！」

馬鹿なのかしら自分？

光柱

「何でこんなことになっちゃうんだろうなー、なんかわるいことしたっけー」

日本の何処にでもありそうな町のさびれた道を、これまたどこにでもいそうな青年が、どこを探しても見かけないような死んだ目をしてしながら壊れたように呟きつつ歩いていた。

ゾンビのようにも思えるオーラを出しながら学校から帰ろうとしている彼の名は浅霧^{あさぎり}謳^{おつらい}來、普通なら青春真っ盛りのはずの18歳の高校生である。

そんな彼がなぜ絶望しきった表情をしているのかというとそれは彼の今までの人生に原因がある。

さてここで皆さんにそんな聞くも涙語るも涙な彼の人生についてを少し話させてほしい。

実は彼、今までの人生様々な事故や事件にあい、そうして巻き込まれた事故や事件で何度も何度も死にかけるような目にあってきた。

たとえば両親と乗っていた車の事故。

たとえば幼稚園の遠足の時に起こったバスジャック事件。

そして小学生二年生には身代金目当ての誘拐犯に勘違いから連れ去られ、

六年生では理科室から出火した火事に巻き込まれ死にかける。

それからも色々死にかけるような出来事が大量にあったが毎回彼は悪運が強いとも言えいいのか今まで致命的な怪我もないまま

生き残ってきた。

大変喜ばしいことだ、がしかし彼にはそれを喜ぶことができなかった。

何故ならそれには唯一つ、そして彼が人生に絶望しきっている原因でもある問題があったからだ。

それは、彼が生き残るたびに周りの人が死んでいくという運命。今までの事件や事故、何度も彼が死にかけける度に誰かが代わりに死んでいく。

最初の事故では母が、バスジャック事件の時には従兄弟の警察官が、誘拐事件では友人が撃ち殺され、火災時には同級生の半分が火に包まれ、父は高校一年の時に彼を庇ってトラックに轢かれて亡くなった。

絵に描いたような不幸と周りの人が死んでいくことに罪悪感でいっぱいいっぱいになっている彼は、様々な方法でこの運命から逃れようとした。

たとえば、体を鍛えてそう簡単に死なないようにしようとし、いつも周りに注意を払うようになった。

それでも駄目だったので悪霊でもついているんじゃないか自分と思い今度はあちこちでお祓いや占いをしてもらってみたが全く効果も出ず馬鹿馬鹿しくなったので止めてしまった。

いつそのこと全部諦めて自殺することも検討したがやめた。今まで死んだ人のことを考え、またどうせ自殺しようとしてもどこかの誰かが自分を助けて死ぬだけだと思ったからだ。

そんなこんなで八方塞がりになっていた彼の最近はおっぱら軽いトリップ、つまり現実逃避にはしっていたのだが、

「謳來てついう名前でも名前負けしてるってどういうことかなー。そんなに大層な名前だとはおもわないけどなー。でもどんな名前だったら名前負けしないんだろーなー。コロン？」

……………それも限界になりかけていた。

そんな彼は今日もずるずると足を引きずるように帰り道を歩いている。

「そう、そうだ自分、明日からは自分にも幸福で春色の人生がまっているに違いないんだ、さあ空を見上げるといい、希望の光が満ち溢れているじゃないか！」

急にそんなことを叫び始めた彼は空を見上げて、

そして目の前は光で包まれた。

光柱（後書き）

がんばって書いていくさ。
楽しみにしてくれると嬉しかったり。

真っ白世界で捕まえて。(前書き)

第二話投稿、がんばってください。

真っ白世界で捕まえて。

「..... さあ今日もきつと楽しい一日が始まるさ。大丈夫、昨日だつて楽しい平穏な日々だつたじゃないか。そう！ついにこれからハッピーな人生が自分を待ち受けているに違いない。信じる、信じるんだ自分、信じなきゃ何も始まらないぞ自分。ということでおハヨ―新しい朝よ、つとなんだこれ？」

いきなり電波じみたこと（毎朝の日課になつた自己暗示である。洗脳）を言いながら目を覚ました謳來、その目の前には真っ白で何も無い世界が広がっていた。
なんだこれ。

「いや、ホントなんだこれ。どこだここ？学校から帰る途中だったような気がするんだが、何でこんなところにいるんだろ？あれ、どゆこと??？」

突然の出来事によくわからん言葉を喋りながらパニくりながらあちこちをきよろきよろと見渡す謳來。
前を見る。何もない。

右を見る。何も無い。
左を見る。何も無い。
後ろを見る。何も無い。

も一度前を見る。なんとそこには形容しがたいぐちゃぐちゃが！

「ホッ！」

「ホ？なんだ一体？」

喋ることができんのかこれ。そんなことを何とか頭の片隅にある
冷静な部分で考えながら、また別の部分で驚愕しつつ彼は今まで出
したことの無いとんでもない大声で叫びだした。

「ホラアアアアーーーーー！！！」

そしてそのまま逃げだした。

「へ？」

ずいぶんと間抜けな声をあげた「それ」は少し呆然とし、事態に気
付いた途端猛然と追いかけ始めた。

「あ、ちょ、待て待て待て待て待て、どこへ行くつもりだお前！戻
ってこい、カムバアアック！え、何、何にそんな怖がってんの？い
ったいお前何を見たんだ？いったいお前何考えてつと、待つてええ
えお前何でそんなに速いの！あり得んでしょそれは！ストオオオツ
プ！」

大声で制止を呼びかける何かよくわからないものと、

「無理イイイ！なんか喋っているけど！返事したいけど！駄目！お願いだからこつち来ないで！お前の姿、あつちや駄目な奴だから！トラウマになるっていうかなった！ホントあり得んから！寝起きにとんでもないもん見せられた俺の身になって！帰って！つか帰して！謝るから！よくわかんないけど謝るから！」

そんな何かから猛ダツシュで逃げる謳來。

お互いに怒鳴り付けながら真つ白空間を猛スピードで走り回る一人と何かの追いかけてを、「スゴク……シュールです。」と後にこの騒動を見た者は語ったという。

そんな彼らの追いかけても、しかし直ぐに決着がついた。

「チツ、このままじゃちが明かん。多少馬鹿馬鹿しいがまあいい。おい！止まれ！さもないと怪我させてでも止めるぞ！」

「無理イイイ！」

代わり映えのしないの返事、それにイラッとした何かは実力行使を決定する。

『転べ』

「うおお何もないのに何故につて、ギヤアアアア！」

その何かが今までと違う声色で喋ると急に彼の足はもつれ合い顔面から地面に突っ込む。そしてそのまま数メートル、彼はその顔面をすりおろされることになった。ワアオ。

「だから待てと言ったのに。なんだ、バカかお前は？」

そしてそんな彼の惨状など関係無いと言わんばかりの態度で何かは彼に近づき話しかけるが、

「……………ビクンビクン」

「はあ、どうしろってのよ。」

やはりというべきか彼が痙攣しながら気を失っている事に気付くと、本当に面倒くさいとでも言うようなため息をはき次に彼が気づいた時にどうすればいいのか考えることにした。何でこんな事になったのかと思いながら。

真っ白世界で捕まえて。（後書き）

うん、まだ終わらないんだ。短いくせにすまない事をしたと思って
いる。このシーンを二話続けるってどういう事なんだろうね。

拒否権はない!! (前書き)

少しは長くできたけど.....、あれ前とあまり変わんない？

拒否権はない！！

「イヤアアアアア！」

目を覚ました途端絹を裂くような悲鳴を上げる謳來。正直キモイ。そして相も変わらず代わり映えのしない真っ白空間。あえて言おう、なんだこれ。

そんな彼は恐慌状態に陥りながらとんでもない勢いであちこちを見渡す。

前を見る。何もない。

右を見る。何もない。

左を見る。何もない。

後ろを見る。何もない。

もう一度前を見る。何もない。

そうだ！まだ上と下を見てないぞ！すぐに確認しなきゃ！

「おい！前を見る、前を！何目をそむけとる！しっかりと見んかい！わざわざ見ても気絶しないように前のキモい奴呼び出して姿変えてやったんだぞ！泣いて感謝するところだろう！こっちを見るおお！」

目の前から声がするが、そんなの彼には聞こえない。見ざる言わざる聞かざる、これから自分の座右の銘はそれに決まりさアとかそんなことを考えている彼は現実から猛ダッシュで逃げ続ける。

「何も聞こえない、なんにも聞こえないよー。そうだ、あっちに何かあるかもしれないぞ。行ってみようじゃないか自分。」

「いい加減にしろオオオ！！『落雷』！」

「ギヤアアアアアア」

しかしながら彼の目の前の存在はそれを許さない。それが何かを呟いた途端彼の身体に電流はしる…！圧倒的痺れ…！電撃…！

「ふざけた事考えとると焼き土下座させるぞそのガキイ！」

「サアセンシタア！！」

今までいろいろな体験した彼だがそれでも焼き土下座は全力でお断りだった。勘弁してつかあさいおつかさん、そんな気分である。もう無理だと現実から逃げ続ける事はできないんだと諦めた彼は目の前にいる存在に焦点を合わせる事にした。そしてそんな彼の目の前にいたのは、

「ようやくこつちを見おつたか、この馬鹿もんが。」

ナイスバディな少女だった。

「アレーーーー？」

（アレ、こんなだったけ？もっと、こうトラウマ的な、クトゥルフみたいな、ああ窓に！窓に！、みたいな奴を考えてただけだなあ？ていうかなぜに自分そんなこと考えていたんだろ？うん？どうなってんだこれ？）

残念ながら彼の頭はぐちゃぐちゃを見たことと顔面をすりおろされたことと雷によるショックでいろいろ無くしてしまった物があるらしい。まあ、無くしたものを考えるとなかなか幸運だったようだ。それは主にクトウルフ的ぐちゃぐちゃとの追いかけてこの記憶だった。

「何がアレーー？、だ。無駄に手間取らせおって、一体最近の人間もつ神様に対する認識はどうなってるんだか……。前回の奴はこの姿にしてロリ巨乳バンザイとか言いながら無駄に興奮しおって、今回はクトウルフ的ぐちゃぐちゃで追いかけてこだと？下級神の中には人間の娯楽に走った馬鹿共が溢りかえつとるし。なんだ？最近の人間の変態度はいつたいどうなつとんだ？神様まで汚染ってどういうことだ？ていうか何でこんな受付みたいな仕事を私がせにやらん。もつと適任の奴がいるだろうに、ブツブツ……………」

目の前の少女もどうやら不満で一杯になっているようで目の前の謳來のことをほっぽらかして自分の世界に閉じこもろうとしていた。原因の一人でもある彼はしかし、クトウルフ的ぐちゃぐちゃってどういう事なんだろうと考えてしまつて危うく宇宙の深淵を覗きかけたあげく七転八倒していた。一体どんな思考回路をしているんだろう。

「……………仕事、変えよっかな……………うん？何やつ」

「イア・ル・リエー！クトウルフ・フタゲン・イア！イア！フング
ルイ・ムグルウナフー・クトウルフ・ル・リエー！」

「何やらかしとんじゃど阿呆！！いったい今までの間何やつとつた
！なんであの化け物召喚しようとしてる！ああ！黙れ！この場所は

まずい、いかん！ええい『落雷』」

「アババババババ！！」

~~~~~この間数十分~~~~~

「つまり物にはそれぞれ決まった運命があるということじゃ。その運命は普通は微弱で大体の物は気にせず暮らしているが、時折とんでもない大きさの運命を背負って生まれるものがある。その様なものは様々な物を巻き込みながらあちこちに影響を与えながら生きてゆくこととなる。そこまではわかったな？」

「つまりあれですか？自分はそんな大きな運命を持って生まれた人間の一人っていうことで？」

数十分後落ち着きを取り戻した彼らはようやく現状の説明を話し合うことができた。いきなりシリアスモードである。（作者もこんなにかかるとは思わなかったぜ。）

「まあそういう事だ。しかしお前はその中でも特殊な奴でな。確かにそこら辺にごろごろ転がっている珍しくもない奴なんだがな、お前ほどの大きさをもつ奴が出現したのは初めてだったらしいぞ。」

「それはどうでもいいんだけどね……で、何なんよ自分の運命？」

「様々な危険にあいそれから助け出される運命。それがお前の運命

だよ。」

「は？」

「あー、つまり勇者の前でモンスターに襲われている村娘みたいな運命だよ。そう微妙そうな顔をするな。普通ならそこまで悪い運命じゃないんだからな。まあその運命は人生で何回か近くにいた危険な運命と人を助ける運命を引き寄せるんだがな、無駄に大きくなつた結果大量にしかも規模のでかい運命を引き寄せてな、正直あのままでいたら大戦争が起きて人類の大半が死ぬ所だったんだぞ。もちろんお前は生き残るがな。そうなつたら不味いということで我々はお前の存在をあの世界から追放する事になった。ああお前の存在を消しつくしたおかげで今までのお前の運命に巻き込まれて死んだ奴はお前の運命が関わらない状況で暮らしているよ。無論何人かは死んだ奴もいるが、お前とは関係ないからな。気にすることはない。うん、喜んでくれて何よりだ。話を元に戻すぞ？普通ならならそこで終わるはずだったんだがな、特に悪いことをしようとも思つてないのにそれは可哀想だろう、という話になってなここに呼んで神々の決定を教えてやろうということになったのだよ。理解したか？」

「理解はしたんだけどね、じゃ、ここはいつたいどこなんでい？話を聞く限りここは良いことがあるように聞こえるんだけど、いったいここに来るとどんな良いことがあるんよ？」

「おや、怒りはないのか。まあ怒られてもどうしようもないがな。」

「自分の今までを知っているでしょうに。いつそ見捨ててくれを繰り返し望むような人生で、正直あのままじゃ発狂してもおかしくなかったからねえ。死んだ人も生きているって聞いたし、むしろ感謝してますよー。で、ここはどこよ？」

「今教えてやるからそう急かすな。ではお楽しみのここの名前を教えてやろう。」

ここの名前は世界の狭間、様々な世界と世界の間にありそれぞれにつながる場所だ。神の不祥事や娯楽その他もろもろの理由でいろんな生物を異世界送りにするために使う場所でな。さあ神の決定を教えてやる。まあ大体の想像はついていると思うが、我々はお前をここから異世界に放り込むことにした。安心しろ、お前の存在にあの光柱が叩き込まれた時点で運命などは吹き飛んで散り散りになったわ。今のお前はなんの運命も持たん人間にすぎん。それはそれで珍しいがマイナスはないからな。前よりかはよっぽどましになったと思うぞ？まあいい、ではここからが本題なんだがな、お前がこれから行く異世界はな、けっこうファンタジーでぶっちゃけ死亡フラグ満ち溢れる中世時代の世界なんだ。それでさすがにそんなところに着の身着のまま放り出すのもなんだから幾つか能力をつけてやることにした。ということ、さあ、願いをいうがいい！わが名に懸けて全て叶えてみせようではないか！」

堂々と立ちながらこちらに向けていい放つ彼女は確かに相当高位の神なのだろう。小さな姿でも衰えない神気は見る者を圧倒した。

「いや、そんなことよりさっさと殺してくんないかな？別に力とか要らないからさ。」

ただしその威厳は、

「ヘッ？」

数秒と持たなかったが。

「いやいやいやいやいや、ちよいと待てよ。なんだその即答は？」

「やー、だから要らんのよ、異世界とか力とかそうゆうの。何かねもう自分疲れちゃったからね、こつぱつと成仏しちゃいたいわけよ。永遠の眠りにつきたいわけよ。だから逝かせてくんない？」

残念ながら彼はもうさつきまでの人生でいっぱいになっていたのでもう一度新しい人生を、という気にはなれなかった。しかしそれでは困る神様はがんばって説得しようとする。

「いやいやそれは駄目なんだって！もう決定しちゃったんだから、つか行ってもらわんと我々が困る、そ「なんで困んのよ？」っ！！」

墓穴掘った。そう呟いた彼女の顔に動揺が広がっているのを見て彼の疑問はますます強まる。

「なんかおかしいよね。なぜに自分の存在を過去から今まで消し飛ばすような光に吹き飛ばされて今こうして喋ることができるんで？普通自分はその消し飛んだっていう運命と一緒にバラバラになるんじゃないんですか？」

「いや、それは……………」

「誤魔化さないで教えてくださいよー、神様でしょう？」

どンドンと突っ込んでいく彼は話している内に相手が笑っていることに気づく。

「どうしたんですか？なんか気味悪いですよ？」

「ふ、ふっははははははははははは！さて！悪いがお前の質問に答える事はできん！異世界送りへの拒否権もないから、さっさと異世界へ送らせてもらうぞ！ふははははは！もうどうあがいたところで無駄だ！既にどうしようもないのだよ！与えた力はおいおい説明してやるから安心しろ！、では…グッバイ！………良い人生を祈つてゐるよ。」

そう言つと彼女は後ろを向き歩き出してしまふ。後にはもうほとんどが消えかかっている謳來だけが残っていた。

「なっ！さては笑ってごまかす気だな！ストップ！せめて説明ぐらいは、あ！おい、……お……イ………」

だんだんなくなって意識の中で、彼は「悪いな」と言う声を聞いたような気がした。

拒否権はない！！（後書き）

ついに異世界へ！

## 青い空、白い砂浜やってきました異世界の海。

「悪いと思ってんなら説明しやがれチクシヨオオオ！　いつたいどんな頭しとんだあの神様は！　馬鹿なの？　死ぬの？　むしろ殺せよおお！」

青い海、青い空。白い雲、白い砂浜。照りつける太陽のまばゆい光を目一杯に浴びながら目覚めた時彼がまずしたことはそう怒鳴ることだった。そしてその後にくる罵詈雑言タイム。何度でも言おう。なんだこれ。

「いい雰囲気です謝ったから許したり流したりすると思ったら大間違いだ！　自分は絶対に許したり流したりしないぞ！　やーい、諦めると思ったか。ざーんねんでした！　甘いんだよ、爪の先から頭のとっぺんまで！　バーカ、バアアアカ、馬鹿神野郎！」

残念ながらお天道様の下に長い間放置されていたので日射病にかかって既に頭がパーになってしまったようだ。  
残念！　彼の冒険はここでおかしくなってしまった。

「なにやつとんだ？　お前は？」

そしてまさにそんな時に我等が救いの主たる神様はカオスな事になっている彼の目の前へと舞い降りなされた。

「どうもこうもおまえがコンナトコロニオイトクカラコンナコトニ  
二二二二。」

言葉遣いまでおかしくなってきた彼を生暖かい目で見つ、彼女は優しい言葉で話しかける。

「ああ、日射病にかかったのか。おおなんとかおいそうに、大変だったな。どれ今すぐ治してやるうではないか。少し頭を弄くるけど我慢しなさい。『倒れる』。」

「ナ…ナニ…フ…？」

「少し治療するだけだ。安心しろ。それに随分危ない考えになっているようだからな、それも治してやるうじゃないか。いや感謝する必要はない、当たり前のことをしてるだけなんだからな。まあ感謝したいぶんには構わないがな。ありがとうございますっていいんだぞ？」

「マテ…ナンカオかしくないk、『睡眠』 z z z z z z z z」

なにか言おうとして眠らされた謳來。そしてそこに最後に残ったのは彼の目の前で怪しい笑みを浮かべた神様だけだった。

~~~~~ 神様治療中 ~~~~~

「ああ！この哀れの子羊めにどうかこの世界で生き抜くための方法を教えてくださいませ！」

「なん…だと…！？」

神様による治療が終了し目を覚ました彼はそう這い蹲りながらいい放った。

（洗脳が変な方向に行った！？確かに時間は短かったが、そんな雑な洗脳をしたつもりはなかったんだがな。まったくこいつはどこまでイレギュラーなんだ？というかキモい！え、こんなの相手にしなきゃいけないの？）

間違いなく自業自得であつた。しかしよく考えると面倒なやり取りの手間も説明も省けていいんじゃないか？とも思ひしばらくこのままで放つて置くことにした。神様は面倒が嫌いなのである。

「で、では教えてやろう。今回の異世界送りは急いでいたしお前の意見も聞けなかったのだな。くじびき、ゲフンゲフン我々が厳正なる審議を行い余りも、意識の奥底にて眠っていたものを態々お前のために持つてきてやつたぞ。」

「おお！このごみための様な魂を持つ私にまでそんなお心遣いを！感謝します、わが主なる神よ！」

狂信者みたいな言葉を連発しながら頭を地面にたたきつける謳來。頭から血を吹き出しながら微笑みを浮かべこちらを見る彼を見て神様はさっきの判断をもう後悔するはめになった。しかし今更後へは引けん。私にだってプライドはある。やるさやればいいんだろう。そんな信念を心に秘め今神様は目の前を見る。

「い、いや、気にするな。大丈夫だ。問題ない。で、今回お前に渡すことになった能力だがいくつかあってな、まず一つがすべての毒を生み出す力だ。それ並みに強力な力だし薬も生

み出せる能力なんだがな、一度に大量に出せないのと、あまり強力なを出すと副作用で周りの物を無差別に巻き込んだり自分にも相当の負担がかかるから気をつけるように。

次が念力、俗にいうサイコキネシスだ。これは大体自分から半径5メートルぐらいの範囲内に運動エネルギーを自由に生み出す能力だ。ただ力はお前の筋力の半分ぐらいの力しか出せん。大岩を自由に振り回したり投げつけるとかは出来ないから覚えておけ。

それに洗脳という能力もつけた。(なんか今の状況だと皮肉にしか思えんな...) まあ効果は低めで人を自由に操るなんて事はできません。せいぜい人からの認識を甘くしたり方向感覚を少しおかしくする程度だ。ちなみに範囲は自分の声が届く程度、距離が離れれば離れるほど効果は薄くなっていくからそこも注意しろよ。

後はある程度の意志疎通出来るようにしたし、身体能力もすこしだけ増やしておいた。

そして最後にお前が死んでは困るから超再生をつけさせてもらった。これでお前は死ぬことはないが気をつけるよ？痛覚は残るから拷問を受けることになれば酷い目にあうだろうし、バラバラにされたり灰にされたりしたら元に戻るまで2、3週間かかるから、あまり過信はするな。死なないというよりも死ねないと考えたほうがいいな。ああ後殺せというお願いだがな、悪いがお前のためだけに危険な橋を渡ることはできません。諦めてこの世界での生活を楽しんでおけ。」

とりあえず普通じゃ言いづらい事を洗脳されている今のうちに片っ端から言いまくる。随分と勝手なことだが、前にもいった通り神様は面倒が嫌いなのだ。

さてと説明も終わったところだしそろそろ帰ろうかと思い謳來に声をかける。

「では私も忙しいのでな。そろそろ帰「ガシィ！」ん、なんだ？」

後ろを向いて帰ろうとした瞬間腕を掴まれて怪訝そうに振り返るとそこには笑顔で腕を掴んでいる謳來がいた。

「どうした？ なにか他に聞きたいことでもあつ、イタタタタ！ イタイタイタイ！ おい何をする腕を掴むな！ 今人間みたいな状態だからそう力をいれられるとイタツ！ 腕！ 腕が折れる！ 何なんだいたい！」

そう叫びながら謳來の顔を見ると、

「それだけか？」

そこには般若が立っていた。

「なっ！ お前、もしかしてもう洗脳を解いたのか！ 有り得ん早すぎ、ムギユツ」

「いやそんなことはどうでもいいから説明と謝罪。説明と謝罪よろしく。早くしないと頭が痛いことになっちゃうぞ」

「頭、頭を掴むな！ ヤバイって頭潰れる！ 潰れるから！ ごめんなさい！ 説明するから許して！ 手離して！」

「逃げない？」

「逃げないから！ 絶対逃げないから！ お願い離して！ ミチミチ頭いつてるから！ 説明するために手え離してえエエエ！」

そこでようやく手を離す謳來。その下では頭を押さえて神様が悶絶していた。しかし彼は容赦しない。ゴロゴロと転がっている神様を

足で止めるとそのまま説明するよう促す。

「神様なのに、神様なのに………」

「では、なんで殺してくんないか説明お願いしまーす」

「うう………、あ、待って！ストップ！顔掴まないで！今言っから！………ふう、では説明するぞ。」

まず始め我々はお前を存在ごと消し去るつもりだったのだ。いくら可哀想でも今までお前のような奴は基本そうしてきたからな、今回だけ特別という訳にはいかなかったのだ。そしてお前が学校から帰っている途中に光柱を撃った。それは間違いなくお前に当たりその世界の記憶からもその存在は消しさったんだがな。しかしお前は何か撃たれた場所で倒れていた。間違いなく存在は消えたはずなのに、お前はいたのだ。まあまだそれだけならまだ幾らでもやりようはあった。

しかし、なら普通に殺そうとしたとき次の問題が出てきた。お前の存在が妙な歪み方をしていたのだ。これは我々もどうすればいいのか迷ってな、このまま殺してはお前の存在に引きづられて輪廻の輪が歪む可能性もあったからな。普通ならそんなことあり得ないんだがお前ならあり得ると我々は考えたわけだ。

そしてならどうしようかと考えたとき、ちょうどこの世界というお前の存在を受け入れるところを発見したのだ。どうやらこの世界に限りお前の存在は歪んでいるなりに安定し続けることができるかと判明した。ならこの世界にお前の存在の歪みが無くなるか、もしくはこの世界にずっと存在させ続ければ問題ない。そう考え我々はお前をこの世界に送ったわけだ。

さあそれでもまだ死にたいというか。この世を終わりにしてまでもそれを望むというのかお前は。」

そうつぶされながらも言う彼女の言葉は威厳に満ち溢れていた。

「いや、別に？」

「へっ！」

まあ、今回もその威厳は一瞬で崩れ落ちることになったのだが。

「んーまあ正直説明してもらえれば満足していたわけだし、別にそこまでして死にたいなんては思ってるわけではないからねえ。ただ勝手に話を進められたのが嫌だったただだからそこまで警戒しなくても別に問題ないですよ？ああでもなんか進展があったり分かったことがあったならできる限り自分に教えてください。やっぱり死ねないってのもいろいろ問題あると思うので。」

「いいのか、そんなんで？」

「問題があつたほうがいい？」

「いや、問題がないのならいいんだが……まあいい、ではこれからのおそらく長くなるであろう人生、今までの分も存分に楽しみたまえ。ちゃんと報告もするから心配するなよ？ではさよならだ。いい加減この体勢もきつくなってきたしな。」

そついうと彼女は謳來の足の下から消えた。まだそこにいたのか、神様。自分でやっておきながらも余りのはまり具合に気づかなかつた彼はそうつつこんだ。

青い空、白い砂浜やってきました異世界の海。(後書き)

これから2、3日あけての更新になるかもしれません。

海で穴でイカでボスで（前書き）

ようやく初戦闘です。まあタイトル見れば大体わかりますけど。

海で穴でイカでボスで

「しかしどうしたもんかね？」

そう謳来は一人海岸で呟く。いや今回は特に何もないよ。

「ここどこだ？」

そんな彼は今現在絶賛迷子中であつた。しかしその事で彼を責めるのは酷だろう。いきなり異世界に放り込まれて迷子にならないやつはいない。責めるとしたらこんなところに地図も持たせずにほつぱらかした神様を責めるべきだ、自分は悪くない、悪くないんだよ！。

ちなみに今彼がいるのはあいかわらずの海岸だつた。後ろは大きくて青い海、他は断崖絶壁に囲まれた小さくて綺麗な砂浜、目の前には大きな穴が口を開けていた。間違いなく洞窟ですねわかります。

「行けってことか？行けってことなのか！？……………でもこの洞窟、ダンジョンだと考えるとここ間違いなく最深部だよな。初っぱなからボスに当たるような気がするんだが気のせいだよな？そんなことないよね、そつだよね神様？」

少し錯乱しかけた彼はとりあえず心を落ち着かせようと思ったことを言いまくる。

『脱！ゆとり教育！』

「チクシヨオオオ!!」

しかし残念なことにそれは彼に余計な心労を増やすことにしかなかった。無情にも突き付けられる真実はふざけたセリフにのってやって来た。他ならぬ神の手によって。

「なんでそんなこと教えた! 知らなければ希望を持って生きていたのに! スパルタ式なんて大ッ嫌いだ! つか姿表せ!」

「なっ! お前が教えてくれと言っただろう! それにすこしでもシヨックを和らげてやろうと態々ふざけたセリフで言っただけなんだからその態度は!」

「ありがた迷惑だ馬鹿野郎! イラツときたわ。大体何でこんな場所からスタートなんだ、もっと他にいい場所があっただろ!」

「仕方ないだろう。そこが一番かつこよく映える場所だつ、あつ!」

「おい! 今なんて言いかけた! そんな様式美のためにこんな場所に置いたのか! ちよつと出てこい、前のやつもつかいやってやる!」

「ハッ、そんなこと言われて出ていく奴がどこにいる。それにお前には能力をくれてやったんだからそれで何とかしろ。ではサラダバ
ー!」

「ちよつと待て! せめて情報を寄越せ。どんな敵だ。」

せめてどんな奴が出てくるのか聞こうとする謳來。しかし神は非情だった。

『見てのお楽しみだ』

「殺すぞ神イイイ！」

そんなことを言っている彼に救いはなかった。

そんなことをしているうちに時間は過ぎていき、太陽もお昼頃だと
さんざんと輝きながら示す。此処で野宿するつもりもない彼は日の
あるうちにここから抜け出そうと考えると洞窟へと入っていった。

「……………いや、これはない。」

洞窟の中は広いホールのような形をしていた。そのホールの両脇に
は海と繋がっているのか水が貯まり、天井のあちこちには崖の上か
ら貫いて来ているらしい穴がありそこから太陽光が降り注いでいる
ため意外と明るく遠くまで見渡すことができた。そんな広いホールの
真ん中に居るものを発見して彼はそう言った。

ぬらぬらぬるぬるとテカリヌメる体表。

ぐにやぐにやと動き続ける灰色の本体。

時折ギョロリと動く死んだ魚のような目。

そんな身体を支えている8本の触手とユラユラと揺れている捕食の
ためと思われる4本の大きな触手。

体長3メートル位のその軟体動物は、足の数こそ違えどそれは間違
いなくイカだった。

「なんでイカが陸上にいてしかもあんなにでかいんだよ……。もしかしてあのマニアックな18禁ゲームに出てきそうなのと闘うしかないのか？ 勝っても嬉しくなさそうだし、もし負けたら誰も望まない展開になりそうな……。オエ。」

気分を紛らわす為に冗談を言ってみたがそのせいで逆に吐き気を覚えた彼はすぐさま頭からその妄想を振り払う。まだ近づいてもないのに既に彼の心は折れかけていた。

「入り口も出口もけっこう高い段差があるから逃げようとしている間に捕まりそうだしねえ。やっぱり殺るしかないのか。まあうじうじ考えても仕方ないから行ってみるか。死ぬことは無いし、いろいろ試すことも出来そうだしね。」

そんなことを言いつつ段差からホールに向かって飛び降りる彼はやはり少し混乱していたようで、

「あ、やば」

まだ一回も能力を使っていないことに飛び降りるまで気付かなかった。

「うん、うん。」

どうやらホールに着地した衝撃で化け物イカは彼に気付いたようで

ぬるぬると近づいていた。どうやら動き自体は遅いようなのだが、長い触手はすぐに彼のほうへと迫っていた。

「まあ、とりあえずやるしかないよなあ。」

こうなりや自棄だとりあえず念力をこちらに向かって伸びてくる触手に当ててみる。基本的な使い方に関しては能力をつけてもらった時に身に付けたようで案外スムーズに出すことができた。伸びてきた触手を弾きおとしたのを見て安堵した彼はそのまま本体の方に念力で攻撃する。

「ボヨン」

「あれ？」

残念ながら本体に打撃は効果はなかったらしい。とりあえず念力で何回も攻撃するもののその分厚い皮でボヨンボヨンと弾かれる。ぶよぶよと揺れながらこちらを押し潰そうと迫ってくるイカの触手を弾きつつ逃げる彼は考える。

（予想はしてたけどやっぱり打撃は効かないか。皮はイカだけど中はイカっていうよりもむしろクラゲっぽいな。どうしょっかな？ 集中すればもつと威力も上がりそうなんだけどそうすると無防備になるし、それにそれでも効くとは思えないしなあ。他の能力でも使ってみるか。）

なら毒を使ってみようと使い方を思い出す。

（えーっと、漠然とイメージするだけでソレっぽいのが出るだったか。何ともお手軽で都合のいい能力だな。まあ細かくイメージをし

ると言われても困るから助かるんだけど。じゃ、いつちょやってみつか。」

「うーん、じゃあ、アイツの皮膚を溶かすような毒を「べちゃっ」うん？」

とりあえず何かだそうと考えた彼の目の前に急にオレンジ色の液体がコップ一杯分ぐらい現れて地面に落ちた。

「ん？もしかしてこれが毒？こつゆう風にでるの？」

もつとこう敵に向かってポーンと飛んでいくのを想像してたんだけどなあ、と洩らしながらこの毒をどう使うか迷う謳來。

結局イカに踏ませようと相手を誘き寄せる。

「ほーれ、コツチだ、こつちこい。そうそのままゆつくりと。ん、なんだかやばいかわいく思えてきた！はい！1・2・1・2！よしがんばってこい。」

自分の仕掛けた罠へとおびき寄せるたはいえゆつくりと律儀に這い寄るイカの化け物を見てかわいいと思う謳來。彼の思考回路は一体どうなっているのか。その答えは神のみぞ知「私だつて知らんわ、阿呆。分かりたくもないわ、そんな思考。』……どうも手遅れというのは確実のようだ。

そしてそうこうしている内にイカがさつき出現させた毒に触手が一本触れる。

「ギイイイイイイイイイ！」

するとその触手の皮が焼きただれたようになり、イカが悲鳴を上げ後退する。実際には触手の分厚い皮の表面が溶けただけであり、そこまでのダメージはないのだが初めて感じるタイプの痛みであり剣で切られた時と違い再生も起こらないので大きなショックを受けているようだ。そうしてイカが叫んでいる間、謳來はというと、

「あ、そうだ毒を念力で放り投げればいいんだ。馬っ鹿でー自分。」
と新しい攻撃方を思いつき喜んでいた。

海で穴でイカでボスで（後書き）

初戦闘だけでもイカのスピードが遅く主人公も色々やっているせいで戦闘っていうより遊んでいるようにしか見えないことに悩み中。

でもこれはこれでいいと思うと開き直ろうかと思う。

それと明日センター試験なので更新できません。なにとぞご理解とご容赦を御願います。

イカに、トラウマに、必殺技に（前書き）

昨日までには更新したかったんだけど間に合いませんでした。すみません。

センターは……………聞くな。聞かないでくれ。

イカに、トラウマに、必殺技に

「ウヒョオオオオオ！」

そんな奇声を発しながら洞窟内を走り回る人影。そんな彼を捕まえようと大量の触手が彼に追い縋る。どうしても最初は1匹だけだった巨大イカはいつの間にか3匹になっておりそれぞれがその人影を囲むように動き続ける。大量の触手によって生み出されたその包囲網を念力で弾き飛ばしあちこちに毒をばらまきながらも逃げ続ける人影は、まあ皆さんもよくご存じの謳來であつた。

予想外のイカの増援に加えてそのある程度の知恵を持っていると思われる行動に萎縮せず、逆にハイテンションになりながら走り回る彼の思考回路はやはりどこかおかしいのだろう。しかしなぜこんな状況になってしまったのか。

その理由を知るには僅か8分ほど前のイカに攻撃を当てたときまでさかのぼる。

新しい攻撃方法を考え付き実際に使ってみようと思った謳來。とりあえずさつきと同じように毒を出しそれを念力で投げつけてみる。投げた毒はテニスボール大の大きさを保ちながら子供のキャッチボールぐらいのスピードで放物線を描きながら飛んでいきそのままイカの本体に直撃。その分厚い肌を溶かす。

「んー、やっぱり皮溶かすだけじゃ駄目か。じゃあ、目玉狙ってみ

ようかね。」

悲鳴を上げ後退させても皮を溶かすだけでは致命傷には程遠いと考えたと次は弱点っぽい所を狙うためまた毒を出す。

「いい感じに距離も離れてるし、折角だから少し集中して撃って弾速が速くなるのかどうか試してみるか。」

そしてまた愚直に突っ込んでくるイカに対して目玉をよく狙ってから射ち出す。今度はピンポン球ぐらいの大きさの毒が真っ直ぐに勢いよく飛んでいく。集中すればこうなるのかと感心しながらそれがイカの目玉に直撃するのを眺める。

「ギイイイイイイイイイ！」

そして、狙い通りに直撃した毒は、イカの右目を溶かし今まで以上のダメージをイカに与える。すでにあちこちが溶かされているイカはまさしく満身創痍といった様子だった。そんなイカは急に謳來から遠ざかると耳なりのするような音で鳴きながら長い触手で地面を叩きだす。

謳來は突然のイカの奇行に驚いたが、すぐに顔を青くした。なんだかモンスターがこういう動きをした時のテンプレ的結果が頭をよぎったからだ。

（必殺技っていうには弱々しいし、全回復っていうには騒ぎすぎだし、むしろこういうタイプやる事って……）

「あれ？これやばくない？なんだか仲間を呼んでいる雰囲気なんだけど。違うよね？そんなことないよね！？あまりの痛みに七転八倒

してるだけだよね？そうだよね神様！」

『 クラーケン ぶよぶよとした灰色の体と4本の長い触手が特徴の海の怪物よ！ 剣は効かないから魔法で攻撃。 ピンチになると仲間を呼ぶから気をつけて！ 』

「神サマアアアア！そんな妖精みたいな姿で出てきてどういうこと！？ゼ●ダか？ナビ●のつもりか！？というか最後のってやっぱりそういうことなの、っていない！？もしかして今のやりたかっただけかあの馬鹿アアア！」

そんな馬鹿なやり取りをしている間にもイカは仲間を呼ぶために騒ぎつつける。

「ええい、仕方ない。仲間呼ばれる前にさっさとやらせてもらおうぞイカアア！行けッ、溶解毒三連弾！その変態を黙らせ「バシヤッ」…………… チッ、もう来やがったか。とりあえずお前は死んどけ。」

洞窟の両脇の浅瀬からイカが3匹出てくるのを見て謳來は舌打ちすると、出していた毒の球3個を最初のイカに射ち出し止めをさす。その毒は仲間が来て安心したのか疲れていたせいかはわからないが動かないでいた満身創痍のイカの顔面に当たりその顔の皮を溶かした。流石の分厚い皮も大量の溶解毒には耐えられ無かったようで体内に毒が入り最初のイカは断末魔を上げ崩れ落ちる。しかし事態は前よりも悪くなっている。仲間が倒されたことに警戒したのか、新しく来た3匹はそれぞれが謳來を囲むように広がりながら近づきながら触手を伸ばしていた。

以上が冒頭の展開までの経緯である。今は少しふっ切れハイテンションになった謳來があちこちを駆けずり回りながらこの状況を打開

するために考え中であつた。

（どうしょ、どうしょ、どうしょ、どうしょ！触手弾くので手一杯で毒射てないしそこら辺に毒撒くと自分で踏んづけそうだし、そろそろ身体へばつてきたし、アレ、これ詰んでね？……………いやまだだ、まだ行ける！信じるんだ自分！今までそれで頑張ってきたじゃないか！…………アレ、でも今までそれで上手くいったことあつたっけ？……………あ、マズイ、トラウマが…）

テンパつた拳句に勝手に精神に致命的なダメージをくらいハイテンションから一気にどん底の気分に落ちた彼は、スピードも精神と同じように落とす。しかしそんなことではイカは手を、いや触手を休めない。そんなの俺達には関係ねえ、野郎共今が好機だやつちまえ！と言っているかは定かではないが、少なくともここぞと言わんばかりに触手を伸ばし始めた。

（アハ、アハハ、アハハハハハハハハ、ゴメンネーミンナゴメンネー……………あ、そうだ洗脳があつたんだっけ。とりあえず足を動きづらくさせてみるか、絡まって転ぶかもしれないし。）

頭の中がやばくなりかかつていたと思つたら急に冷静に考えだす謳來。彼にとつてこんなことはよくあることであつた。彼の人生、色々あつたのである。

まあそんなことよりも目の前のこと。一回試してみるかと洗脳を実際に使つてみる謳來。すると周りにいたイカ全員の動きがおかしくなりはじめた。伸ばした触手が絡まつたりバランスを崩して倒れかけたりと混乱しているイカを後目に謳來は包囲網から抜け出し距離をとる。イカはそれを追いかけようとするが、まだ混乱しているのかあつちいたりこつちいたりを繰り返し前に進めないでいた。そんなイカを見ながらどう倒すか謳來は悩む。

「さあてどうしようかねえ。今までと同じようにしてもいいけど時間が掛けると持ち直してきそうな気がするしなあ。なんかこう一撃で倒せるようなの無いか。大量の毒を叩きつけるのは出すのに時間が掛かるし持てるかも不安だから難しいしこれは無理か。念力も引きちぎるのも力が足りないし、洗脳で同士討ちはそこまで洗脳のスペック高くないから駄目。……念力でサイコカッターは出来るかな？でも切っても再生するんだっけ。じゃあこれも……ああ毒を使つてウォーターカッターみたいにすれば切れるか。毒だと再生できないみたいだし、時間はかかるけど幸い今は時間があるから十分に集中して出来る。それに毒もそんなに出さなくてもいいし、おおいいいんじゃないかこれ！時間がかかるけどそんなところも必殺技っぽくて、しかも洗脳をうまく使つて時間を作つてから攻撃つていうコンボっぽいのもできる。威力あつて使いやすくてロマンもある！三拍子揃つた必殺技！よっしゃ実践だ！！」

いい考えが浮かんできたおかげで、テンションも元に戻ってきた謳來。さつそくまだのろのろと蠢いているイカのほうを向き毒を出す。それを時間をかけて細く長く帯のようにしているとようやく立ち直つたのかイカが謳來のほうへと向かつて進みだした。

「ん、こんなところか。じゃあやってみるか、むちみたいに動かせば切れるだろ。さあいくぞイカ共、切り殺してくれるわ！！」

しかしどうやら少し遅過ぎたようだ。謳來ははっちゃけた台詞と共に長い帯のようになった毒を飛ばす。謳來に操られ向かつてくるイカに対して襲い掛かるその毒はまるで蛇のようにイカに絡みつきその軌跡に沿つて斬りつけながらその命を刈り取っていく。そしてその毒がイカの後方に達するころには全てのイカがばらばらに斬られ死体となっていた。

「ふう、なかなか初戦闘にしては上手くいったな。しかしきれいに斬れてるなこいつら、まるで刺身みたいになったじゃないか。まあいいことだな！」

体液もこぼれ出てなかなかグロテスクなことになっている死体を見ても全くと言っていいほど動じていない彼は少し現代日本人としては少し違和感を感じるがそれは仕方ない。彼は現代日本人としての普通の生活ではあまりない体験をしつづけたのだから。彼の今までの人生本当に色々あったのだ。

『おおあいつらを倒したのか。うん、初めての戦闘にしては上々の結果だ、正直感心したぞ。』

「うるせい、いきなりボス級の相手にぶつけやがって。まあ案外楽に殺せたからよかったものの、もしもどこかでミスって飲み込まれたらどうするつもりだったんだ。トラウマを新しく追加させるつもりか？殴るぞ。」

『そついうな、おかげさまで色々と経験できただろう？しかし驚いたぞ？クラーケンを簡単に殺すとは。奴らはこの世界では強いほうだからな、ま、お前との相性はいい方だったがな。それでも4匹と戦って勝つことは難しいからな。誇っていいと思うぞ。ああそれよりも嫌だろうがそいつらの死体を少し漁ってみろ。たぶんそいつらぐらいの大きさなら宝石が見つかるかもしれんからな。』

「宝石？なんでそんなもんがイカから出てくるんだ？」

『そいつらの持つ平衡石つてのが貝の真珠みたいなものになっていくの。これから生きていくのになにかと先立つものがあつたほ

うがお得だろう?。』

「真珠ねえ、さすがは異世界といったところかな。まあいいや、情報ありがとさん。」

『ふつ、気にするな。それとさすがに疲れただろう、最初の砂浜のところ最低限の荷物と寝床を用意してやった。今日はそこで休んで、明日洞窟を抜けだせ。』

無駄に優しさを見せる神様。そのことに驚きながら謳來は彼女に聞いてみる。

「どうした?なんか気持ち悪いぞその優しさ。いや嬉しいんだけどね。」

『容赦ないなお前は。せつかく優しくしてやっているというのに。私はもともと優しいぞ、今まで見せるときがなかったただけだ。ほれさつさとイカから宝石集めて寝る。気づいてないだろうがお前実は相当疲れているんだぞ。』

「ふーん、まあそういうことにしとくわ。じゃ、さいなら。また会う日までだ。」

『たぶん明日もしゃべると思うがな、さよならだ。』

そんな別れの挨拶がすむと謳來はイカの解体をおこない幾つかの宝石を得、そのまま休むために砂浜へと向かった。

イカに、トラウマに、必殺技に（後書き）

今回登場したモンスター、クラーケンは本当は神様が言っている通り強いんです。物理攻撃は効かず、触手の範囲は広く、しかも基本的に狭い所しか出てこないためです。ただ謳来との相性は非常に悪かったんであつさり殺られてしまいました。動きが鈍いため毒が簡単に当たり、海から上がってきたばかりのまだ移動に慣れてない所に洗脳をかけられ、物理攻撃はしてこない。まさに天敵だったということです。

日の出と洞窟とスプラッタ（前書き）

遅くなったのに短くてすみません。

日の出と洞窟とスプラッタ

「.....さあ今日もきつと楽しい一日が始まるさ。大丈夫、昨日だって楽しい日々だったじゃないか。そうry（以下省略、てなわけでオハヨーっとあれ、まだ暗いな。ここどこだ？」

まだ日も出ていない時間に、相も変わらず電波で危ないことをまくし立てながら起床した謳來。人間、毎日の習慣はそう簡単には抜けないものである。そして謳來の自己保身のための自己暗示が変わるわけなかった。

「ああ、そういえばここ違っただけ。オハヨー異世界ってところかな。昨日は早く寝たからね、起きるのが早くなったのか。じゃあこれから異世界の生活での初日の出かあ、見た感じちょうど日の出る方向みたいだし綺麗に見れるだろうし楽しみだな。そういえばこういう風に景色を眺めることなんて今まで一度も無かったし。」

あと一時間ぐらいかなと言いながら寝袋から抜け出し、神様から貰った荷物からなにか食べ物でもないかと探し始める。

「何でオニギリとお茶があるんだ？いや好きだし美味しそうだから嬉しいんだけどさ。うん、後は全部パンと水か。なにこの反応に困る優しさは...、どんな顔して話せばいいのかわかんなくなっただわ。」

結果、美味しそうなオニギリとお茶を一食分を見つけて反応に困ることになった謳來であった。

普通にありがとでも言っておくか、と神様に会った時のことを考えつつ砂浜で日の出を待ちながらオニギリを食べる彼は、物心ついてから初めて、心底楽しそうな表情をしていた。

「なかなかいいモンを見た。あれだな、この世界つてのは景色が妙に綺麗なところがいいな。この洞窟もなかなか綺麗じゃないか。出てくるやつらもいい感じにテカってるし。」

あの後、日の出を見た後にそろそろ他のところに行くために洞窟へと足を踏み入れた謳來。鍾乳洞のようになった洞窟の内部はカンテラの光を柔らかく受け止めボンヤリとその姿を写す。

時折出てくる宙を浮く魚や巨大な貝も洗脳を使って敵だと認識されないようにしたため彼を気にせずに普段どおり浮いているので、本来なら狭い空間と厄介な敵が大量にいるせいで難易度の非常に高いこの洞窟で、彼はまるで水族館の水槽の中のような気分を味わっていた。

「しかし長いな。曲がりくねっているから仕方ないとはいえ、休み休みの催眠と3時間歩きっぱなしのセットは結構きついね。っと岩がゴツゴツしてきたな、そろそろ出口か？」

だんだんと今までの壁面の柔らかさがなくなり無骨な岩が目立ち始め、モンスターも海洋生物のようなものからコウモリやネズミのような哺乳類へと変わってきたのを見て謳來はそう判断する。

ならそこまで強い敵は出てこないだろうと考えていると催眠の効果が急に弱まってくる。すると今まで静かだった洞窟は途端に騒々しくなり、あちこちにいたモンスターが謳來目掛けて襲いかかってきた。

「このくらいの洗脳だったら休み休みで3時間ぐらいが限度か。しかし洗脳があるのと無いのとじゃここまで変わるもんなんだ。

まあ、これぐらいなら念力で十分なんとかなるんだけど面倒だな。毎日瞑想でもしたら念力とか催眠って強くなるのかな？試してみよつか。」

考えることをしているせいか、襲いかかってくるモンスターもあまり意識せずに片っ端から念力で叩き落とし洞窟を進む謳來。

意識していないためなのかモンスターは容赦ない攻撃をくらい血塗れのぼろ雑巾のようになりながらごつごつとした壁面に叩きつけられる。そのため彼が通った場所はスプラッターなことになっていた。

（アレ？でも催眠が使えなくなっても念力は使えてるな。それに念力を使っている時にはあったあのだるい感じは催眠を使っていたときにはないし、二つの能力の原動力は違うのかな？

この洞窟から出てどこかで落ち着いたら調べてみようか。）

しかしそんなことには気づかずどんどんと洞窟を進む彼はそれから10分ぐらい経った後、だんだんと出口に近づき明るくなる頃になるととようやく周りの惨状を認識した。

「うん？明るくなってきたな、じゃあそろそろ出口かなつと、……
おお、なかなかグロテスクなことになったのね。悪いことした
な、まあ襲ってきたんだから仕方無いんだけど。うん、気にしなく
てもいいか、敵だし。」

久しぶりだなこんな真っ赤な光景と少し昔のことを思い出しながら
そう呟き、それでも大して気にしていないようにさっさと歩を進め
る謳來。後には真っ赤に染まった洞窟だけが残った。

日の出と洞窟とスプラッタ（後書き）

背景描写の練習中。どうも上手くないかない。

地味な危機（前書き）

受験勉強がぁ……遅くなってすみませんでした!!

地味な危機

「これは凄いな。うん、実にこれは素晴らしい、これこそが雄大というものだよ。驚いた、いや感動したよ。」

『喜んでもらえて何よりだ。』

それが洞窟を出た直後に謳來が言った言葉である。彼の目の前には何処まで続いていくのか想像できないほどの大草原が広がり、その上には吸い込まれそうな青空と幾つかの雲が浮かんでいる。ちょうど太陽が頭上に上がった頃でさんと全てを照らすかのように輝いていた。

「今回のこれもさっきの日の出も勝るとも劣らない景色だな。しかしこういう景色や世界はやっぱりお前が創り出したのか？神様さん。」

『いや、私は関係していないな。勝手にこうなったものだ。まあ時々我々の中で芸術好きな奴がこういう風景を創る事もあるがな。しかし私たちが世界を作ったなんていったか？』

私たちがしているのは勝手に生まれてくる世界をある程度管理しているだけだからな、勘違いするなよ。

だからこそ時々よくわからん出来事が起きたりお前みたいなのが現れたりするんだ。

……ああ違うそつちじゃない、街はあつちだ。』

「おお、ありがとさん。じゃあつまり全知全能って訳じゃないってことか？」

『ハッ、人間に殺される神もいるというのに………全知全能など所詮空想でしかないということよ。』

とりあえず町のあるほうへ歩きながら会話を続ける二人。その謳來の言葉に自嘲気味に笑いながらもそう返す神。

「………神さんはどれくらいなんだ？ けっこうぼこぼこにしたりされたりとやってきたけど、結構高位のような気がするんだよね。」

『私か、そうだな………10段階でつけるとするなら8番目くらいだな。それでも世界を壊したりする事はできん。せいぜいその世界の中に在るものを全て破壊出来る程度だ。』

「十分すぎるくらい力があると思うけど………そんなのとぼこぼこにしたりされたりしたのか、凄いな自分。」

『そこで自分を凄いと言うか、お前は……。まあいい、ちなみにこの世界で信じられている神は2ぐらいで国家の一つや二つなら簡単に滅ぼせるぐらいだな。まあ俗に言う魔王もこれくらいの強さだな。人間も才能と努力と運が一級品で揃っていればここまで来る奴も稀にいる。今のところ人間の最高は5だな。宇宙一個破壊した奴がいたぞ？』

「とんでもない化け物もいるもんなのね。ビックリだわ。」

『お前だつて相当だぞ、身体能力では枠外だが、殺すだけならば毒を使って8ぐらいまで殺せるぞ。』

「身体能力でもなんかすごいようなことになつてゐる気がするんだけどつていうか毒強力すぎじゃないか、いいのかそんなの？お前も殺せるつてことだろ。」

『いや、今のお前は身体能力だけなら小規模の軍隊程度で、この世界だとそのくらいのやつは結構いるからな。それとその毒を使おうとしても反動のせいでお前も5年ぐらいぶつ倒れたままになるし、そもそも殺せるというだけだ。隙などつけるはずも無かるう。』

「そんなもんか。」

『そんなもんさ。さてじゃあ今日はこのくらいだな。そろそろ私は戻るぞ。二十時間ぐらいこの方向に走り続ければ街に着くからがんばれよ。』

後この辺には盗賊やらは出てこないがモンスターは出るから気をつけて、野宿するときは周りにモンスターを寄せ付けなくする毒を撒いてから寝るといいぞ。まあ所詮雑魚、バツタリ遭遇しても気にせず簡単に殺せるやつばかりだから緊張らずにいけ。では失敬するぞ。』

「ああ、助かりましたよ、ってちよつと待ち、遠すぎないかその街………もういないかあ。ふう、まあとりあえず行くしかないねー。」

ずいぶんと遠くに街があると知った謳來。しかしそんな彼には歩き続けるよりほかに道は無いのだ。
がんばれ、謳來！！

「ようやく着いたぁ……」

その後、走ったり戦ったり少し眠ったりなんやかんややりながら何とか丸一日かけてようやく街が見えるところまで行き着いた謳來。

「流石に疲れたからなあ、もう夕方だし今日はゆつくりと休みたいんだけど。大きい街だし宿がないってことはないだろうからそこは問題なさそうだけど。」

見た感じ門番が守っているみたいだし身分証とか通行手形とか要らないといいんだけどな。」

予想以上に大きかった街とその門の前にいる門番に少し不安を感じる謳來。

でも疲れたし危なくなったらに洗脳か毒を使えばいいか、などと考えながら街の門へ進む謳來。そして当然の結果として門番に声をかけられる。

「おい、そこのお前、ちょっとこっちに来い。」

「はい？自分に何の用ですか？」

「いやなに、一応危ない奴かどうか確かめるだけだ。確かめるといっても武器の確認と幾つか質問させてもらっただけだ、緊張すること

はない。」

それを聞いて顔は笑顔のまま心の中で冷や汗を流しまくる謳來。

（あれ、やばくない。どこから来たのかって言われるとすごくきついんだけど？武器も持ってないし…

ええいこうなりやごまかしてやる、やってやるぞ自分。信じれば何だってやれるんだあ！！）

とりあえずなんとか頑張るで行こうと思っている。それでいいのか？

「じゃあいくつか質問させてもらうがいいか？」

「（無理っ無理！！）ええ、どうぞ。」

「んじゃまず名前と、北の方から来たみたいだが一体どこから来たんだ？黒髪って言うとは東の方から来る奴って話なんだがな。後武器と、もしあったらギルド証を見せてほしいんだが。」

「（へえ、アジアみたいな場所があるんだ、だとするとやっぱりここはヨーロッパみたいな場所か。それにギルドなんてのがあるってまあ大体予想はつくけど）

えーっですね、自分は浅霧と申しまして、東から来た船ですつと北にある港に到着してすこし見聞を深めようとしてまして、こっちに行こうとして途中までは馬車で来ていたんですが、途中で馬車が引き返してしまったのです。で仕方ないから魔物避けの薬でここまでやってきました。だからすいませんがギルド証も無いし武器も途中で折れてしまっ……」

「ああ、気にすんな。どうせ形だけのもんだからな、それに悪い奴

じやなさそうだしな。入って構わないぞ。ではバルンベレルへようこそ、歓迎するぞ。」

「ええ、ありがとうございます。では。」

実は結構怪しく見られていた謳來だったが、見た目がそこまで警戒されるほどのものでは無かったことでもしも問題を起こしても対処できるだろうと思われたので通されていたのであった。

一方そんなことは露とも知らず、案外問題なく通れたと思っている謳來はとりあえず門をくぐってからこの街について考えてみる。

バルンベレルという名前の街は、円形状に広がる街並みに真ん中にある広場、そこから十字に延びる四つの大通りが特徴の大きな街だった。

おそらく大体の店は大通りに面した場所にあるだろうと検討をつけ、宿を探す前にまずはお金を手に入れるかと装飾品や貴金属を扱う店を探そうとする謳來は目の前の賑わっている通りに足を進めていった。

地味な危機（後書き）

間がどんなことになるかわかりませんが、まだまだ書いていくつもりです。
がんばってください！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0594q/>

地味に地道にやっぺいこう。

2011年8月20日22時54分発行